

国際助成プログラム活動報告会（対談）

「共感」を考える

助成プロジェクトの事例から

International Grant Program Project Reports
Let's Talk about Empathy
Conversations Between the Grantees

報告書
Report

2023年3月
March 2023

日本語：P02-17
English：P20-34

はじめに

トヨタ財団の国際助成プログラムは「アジアの共通課題と相互交流ー学びあいから共感へー」をテーマに掲げ、実務者同士の直接的な相互訪問という手法をプログラムの基盤に据えてきました。しかし、2020年初頭からのコロナ禍により他者と対面する場が減り、コミュニケーションの多くがオンラインで完結するようになったことで、プログラムの根幹となる相互交流の意義、さらにそこから期待される「共感」のあり方についても再考が求められています。

このような背景を踏まえ、本企画では「『共感』を考える～助成プロジェクトの事例から」というテーマのもと、「教育」、「デザインのカ」、「医療・ケア」という各回の切り口に沿って助成プロジェクトの概要を報告いただくとともに、プロジェクトを通じた共感の捉え方、またそれをどのように社会課題の解決に役立てようとしているのか等について、対談形式でディスカッションを行いました。その様子は、YouTubeでご覧いただけます。

このレポートは、スピーカーの方々が実施したプロジェクトの概要と、ディスカッションのポイントをまとめたものです。

トヨタ財団YouTubeチャンネル

<https://www.youtube.com/c/TheToyotaFoundation>



目次

[日本語編 Japanese Edition]

はじめに 02

プログラム 03

第1回 教育 登壇者&プロジェクト紹介 04

レポート 06

第2回 デザインのカ 登壇者&プロジェクト紹介 08

レポート 10

第3回 医療・ケア 登壇者&プロジェクト紹介 12

レポート 14

トヨタ財団・国際助成プログラムについて 16

[英語編 English Edition 20 - 34]

第1回

教育

スピーカー

草薙 佳奈子

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター 助教

橋本 沙耶加

SALASUSUツアー事業部 マネジャー

第2回

デザインの力

スピーカー

神尾 涼太

株式会社リ・パブリック ディレクター

森 雅貴

特定非営利活動法人イシュープラスデザイン ディレクター

第3回

医療・ケア

スピーカー

佐々木 淳

医療法人社団悠翔会 理事長

森 博威

順天堂大学医学部総合診療科学講座 准教授

〇〇 登壇者 & プロジェクト紹介 〇〇

草薙 佳奈子 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター 助教

教師の学びのシステムづくりについて、日本とインドネシアで研究。途上国の学校現場支援の経験から、社会・文化的文脈に即した、持続発展可能な教育システム作りに関心を持ち、教師の協働的な学びを支える授業研究と、子どもの全人的な成長と学びを支える特別活動について、日本の教育モデルの海外の文脈での実践を支援し、その研究に取り組む。また、途上国と先進国の垣根を超えた持続可能な開発のための教育(ESD)を目指し、日本・インドネシア・マレーシア間でグローバル市民性教育実践の交流と、教師・子どもたちの対話を通じた学び合いの場づくりとその研究に携わる。

ポスト・コロナ禍の共生社会に向けたインドネシア・マレーシア・日本における対話と協働を通じたグローバル市民性教育(2020年度)

新型コロナウイルス感染防止対策により世界中の学校が閉鎖され、改めて持続可能な社会に向けた教育の意義を問い直すきっかけとなった。ソーシャル・ディスタンスにより、人々の物理的なつながりが分断され、経済的・社会的活動が制限された。その結果、各国で社会的排除・不均等の問題が露呈し、不寛容な社会の中の「生きづらさ」が課題として浮上した。学校が再開されるにあたり、豊かな社会の構築に向けこうした社会課題の解決に向けた新しい教育の形が必要とされている。今回のGlobal Empathic Multicultural(GEMプロジェクト)では、インドネシア、マレーシア、日本において、多文化共生社会に必要とされるグローバル市民性を育成する教育活動をデザインした。地域参加型の取り組みにより地域の課題解決のための対話と協働を促し、国際交流を通じ背景・価値観の違う他者と学び合う国際理解教育体験の場を提供した。

2020-22年のプロジェクト期間中、日本の学校では学校行事の中止・縮小などの活動制限があり、インドネシア・マレーシアではオンライン・遠隔教育による授業が行われ、各国の教育現場で試行錯誤が続いた。先行きが見えず変化の激しいコロナ禍の中、GEMプロジェクトでは、子どもの成長に寄り添う創造的な教育活動の挑戦を支えるため、安心な教師のコミュニティと学びの場づくりを目指し、1. オンラインワークショップ(3カ国共通)、2. 対面ワークショップ(国別)、3. グローバル市民性教育活動の研究会(Tokkatsu Lesson Study)、4. 対面での教師の国際交流、5. 子どもたちの国際交流(オンライン)を実施した。



橋本 沙耶加 SALASUSUツアー事業部マネージャー

大学卒業後、東京都の公立小学校教諭を経験。2016年にカンボジア、シムリアップに移住。1年間、農村部の小学校支援や女性たちの働く紙漉き工房の運営、ナイトマーケットでの商品販売に携わる。2017年よりSALASUSUに参画。「カンボジアにあるSALASUSUの学び場で、自分の大切にしたい価値観に気づくプロセスを共に踏み、多くの若者の成長を応援する一人でありたい」をモットーに、現地渡航型・オンライン型の中高校生、大学生向け学習プログラムを開発提供。インターンシップ生の育成や先生向けのプロジェクトにも携わっている。



日本とカンボジアにおけるグローバル社会課題を通じたソフトスキル教育を牽引する 教育リーダー育成事業(2020年度)

不確かな時代を生き抜く若者たちのソフトスキル教育を加速するには教師個人の原体験に基づく深く強いリーダーシップの発露が重要である。そこで本プロジェクトでは日本とカンボジアという発展フェーズの異なる国の教育従事者が、両国に赴き、他者との対話を通じて自己の価値観を揺さぶり、深い自己理解を促し、グローバルな社会課題を通じたソフトスキル教育を加速する真のリーダーとして成長することを大きな目的とした。

このプロジェクトには、日本の高校教師11名、及びカンボジアの教育関係者(小学校教師・英語教師・職業訓練校職員・NGO職員)10名(計21名)が参加し、SALASUSUのコーディネートのもと、両国の教育者たちがオンライン(Zoom、Slack、その他SNS)や各国で実施された研修にて繋がり合い、互いを鏡にしながら教育者としての原点に立ち返る時間をもった。そして、それぞれの教育観や志、大事にしている価値観やあり方、両国の文化や言語、衣食住の違いをヒントに、自身の児童・生徒たちに提供したい授業やワークショップ、資料教材等を形にしていくことに挑戦した。

2年間で『①同志との出会い・自己内省 ②小グループでの制作物(授業・ワークショップ・資料教材)の企画・開発 ③制作物の実践・振り返り』の3つのフェーズに区切り、各参加者のペースに合わせて活動を進めた。

活動の成果として、第一に、参加者の教育リーダーとしての成長があげられる。第二に、参加者自身がオンラインコミュニティや現地訪問を通じて「本物」を体験し、授業や教材に反映させることで、目の前の児童・生徒たちの社会課題への当事者意識の向上や、キャリア選択の幅を広げるきっかけを与えられたことがあげられる。第三に、参加者同士が互いの教育課題や教育者としての葛藤を曝け出すことで、今後の教育活動において重要な問いを投げ合い、共に思考したり模索することのできるかけがえのない人とのつながりを構築することができた。今後も共通の課題認識や葛藤を抱えた横のつながりの広がりが、いびつな教育システムに対抗する原動力となり、それぞれの国での教育変革を導くことを期待する。

フル(約90分)



YouTube



ダイジェスト(約15分)

「教育者も一人の人間として子どもたちに向き合っている」という原点に立った2つのプロジェクトの対談でした。正しい答えを求められがちな教育の現場において、一人の人間としての教育者に寄り添い、国や立場を超えた共感の場づくりを目指したお二人が経験した困難や成果をお話いただきました。

人間としての教育者を後押しする

草薨

インドネシアの学生たちとの対話の中で、貧しい地域出身のため、家族の経済的な期待を背負って先生になるという話を聞きました。このため、「本当に自分が先生になりたいのかわからない。ただ期待に応えなくてはいけない」という葛藤を抱えていました。インドネシアでは、子どものためを思うよりも政府の方を見ている人がキャリア的には成功するから先生にならないという学生もいる。でも、子どもたちのためを思って頑張っている先生たちももちろんいるので、そこを応援したいというのがありました。それは日本も同じ状況で、子どもたちを思って頑張っている先生が必ずしも報われず、過労になって辞めていくという現状があると思います。

橋本

私は前職で小学校教員をしていましたが、それまで、必死に考えなくても大学まで行けて、そして先生になれたという人生だったんです。それで、初めて挫折した経験が教員1年目でした。急に目の前に38人の子どもたちがいて、いち担任として授業をしていく、日々の学校生活を運営していく、となった時に、予期せぬ事態が次々と起こって、どうしていいか適切に対処できない自分がいました。自分は本当に正しいのかということに悩み始めて、先生という自分と自分自身とのギャップに挟まれて、目の前の生徒たちに何をどう教えていいかわからなくなってしまいました。

現職でカンボジアでの活動に関わって、改めて自分自身何も知らなかった、本当に何もできない、と思うことがあって、こんな自分が教鞭をとっていたことへの恐ろしさと同時に、本当に狭い世界で生きていたということを実感しました。その原体験から、日本の学校教育と、社会に出た時にいきなり自分の頭で考えたり、多様な考え方を求められることに、かなりギャップがあったので、今回のプロジェクトではそのギャップを少しでも和らげるために、教職の現場で活動している先生たちとできることに取り組んだり、先生自身がやりたいことをできることが、子どもたちにとっていい影響をもたらすということ、プロジェクトの中で少しでも共有できたらいいなと考えました。

つまづきから学び、活動にいかす意義

橋本

カンボジアの先生が、子どものころ宿題を忘れて自分の先生に竹か何かで叩かれて、本当に勉強が嫌いになったそうです。でも、NGOとの出会いで10代になってから教育の大切さを学んで、そこから教育への希望や、自分の国に本当に必要なことだということを見つけた、と話してくれました。その話を聞いた日本の先生が、自分も集団行動が絶対の日本の教育の中で、ちょっと違う行動をした時に集団から外された経験があって、その時の痛みが教育に携わる原点にあるという話をされて、「そうではなく、もっと教育をポジティブな方向に引っ張っていきたい」という願いが、お互いの中で共鳴したことがありました。

多分インドネシアやマレーシアの先生も、自分自身の価値観とか、人生を振り返ってなぜ教育者になったのかといったことを、特に今回のコロナをきっかけに皆さん振り返ったのではないかと思います。



橋本 沙耶加



草薨 佳奈子

草薨 インドネシアの校長先生と日本の幼稚園の園長先生の対話で、インドネシアの校長先生が、教育者としてのやりがいを思い出した場面が印象的でした。コロナ禍でインドネシアの学校もオンライン教育が続き、「子どもたちが十分な教育を受けていないのではないか」という保護者の不満にどう対応したらいいかわからない、という悩みが共有された時に、日本の園長先生が、「保護者も先生も求めているものは同じで、子どもたちにいかに楽しく良い学びの場を提供できるかということを目指しているの、そこをしっかりと説明すれば絶対に保護者も応援してくれるんですよ。子どもたちの様子や先生の思いをこちらからまず説明してあげると、保護者も喜んで応援してくれますよ」と言われて、インドネシアの先生もハッとしたんです。保護者から苦情が出るとどうしても責められていると保護者と対立してしまうのですが、目指しているところは一緒だということを感じて、対話をすればお互いに学び合えるところに、教育者としてのやりがいや楽しさがあって、それをインドネシアの先生が思い出したのがすごく印象的でした。

「先生」「専門家」の立場を超えたコミュニケーション

草薨

学び合って実はすごく難しく、特に新興国の教育現場ではやはり学力中心という意識が高く、先生は正しくなくてはいけない、正しい知識を教えないといけない、というところがあります。

「どういう風にこのグローバル市民教育をするのが正しいのか」という質問を受けても、そのやり方を探るのは本当は先生自身なわけですよ。正解はない、というのを伝えるのが最初の頃大変でした。

いろんな学校で違う実践があって試行錯誤しながら作り上げていくというのを分かってくださった方もいると思いますけれど、正直まだピンと来ていない人もたくさんいるかもしれません。

橋本

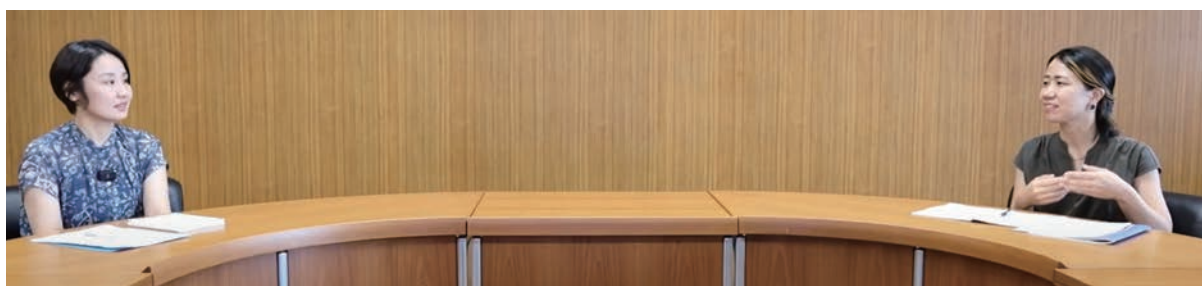
実際に試行錯誤してみて初めて、自分にはこんなスキルが足りないとか、自分は本当はこういうことをしたいんだということになるのですが、無理なく先生たちをそういう場にもっていくまでが、私はすごく難しかったです。先生たちが、本当の自分としてやりたいことをみんながいる場に投げるにはどうしたらいいんだろう、しかもオンライン上でどうやって引き出したらいいんだろうということは、すごく悩んだと今振り返ると思います。

草薨


コロナ禍によって、教師も試行錯誤している中、いつも正しい先生でいられなくなって、個人としてどんな人なんだろう、何を求めているんだろうという人間性が問われる面白さはあったと思います。今まで、役割によって縛られてしまい、それが生きづらさにもつながってくるし、ある意味教育の不自由さでもあったと思うのですが、教育者でも学習者でも、単に学校のルールを守るのではなく、むしろそのルールを変えていったり、社会の枠組みを変えていったりする取り組みができるのではないのでしょうか。

橋本


プロジェクトを通じて先生たちの殻をどう破るかに力がかかる場面があったのですが、そういう時に、自分自身が目の前にいるその人を、「先生」として見ていると感じることもたくさんあって、一人の人としてしっかりと見られているか、というところに結構葛藤がありました。今後もいろいろな人と出会うときに、対話とか余白の時間が、すごく大事になってくると思います。そういう、今後の人生においても大事な学びを得られるプロジェクトでした。



〇〇 登壇者 & プロジェクト紹介 〇〇

 **神尾 涼太** 株式会社リ・パブリック ディレクター

神奈川県出身。バルセロナ大学大学院・空間プランニング&環境マネジメント修士課程卒業後、カタルーニャ先進建築大学院大学 (IAAC)・Design for Emergent Futures (新興未来のためのデザイン) 修士課程卒業。バルセロナ大学大学院では、バルセロナが進める都市計画スーパーブロックとジェントリフィケーションのメカニズム研究をはじめ、都市地理学の視点からアーバンイズムの研究を始める。専門は、新興テクノロジーを用いた自立分散型都市デザインのプロトタイピングおよびビジョニング。2019年よりリ・パブリックに参加。



パンデミックによる衛生観念の変容から考える、食を取り巻くパッケージやサービスにおける人間中心の循環システムデザイン (2021年度、助成中)

世界的に大量生産・大量消費・大量廃棄の線形経済からの脱却が叫ばれる一方、COVID-19によるパンデミックは、衛生的観点から社会に大きな意識・行動変容をもたらしている。特に我々の生活に身近な課題で、これまで「脱・シングルユース」をキーワードに解決策が模索されてきた「食」を取り巻くパッケージにおいては、パンデミックによって変容した生活者の衛生に対する新しい価値観が、廃棄物を減らすという環境的ミッションと摩擦を生じており、両者の共存が強く要請される事態を招いている。

本プロジェクトでは、今後人口増加が見込まれるアジア諸国への展開を前提に、循環経済先進国・台湾と今後成長が期待される日本で先駆的に、「人間中心の循環経済社会」のアプローチでアジア発の循環システムデザインに取り組む。

プロジェクトは、1)リサーチ、2)デザイン(プロトタイピング)、3)ドキュメンテーションの3段階を予定しており、1年目は日本・台湾両国で生活者の行動様式を洗い出すリサーチ手法の確立とユーザーリサーチを実施した。今後、リサーチ結果を元にした食を取り巻くデザインの試作と、全体プロセスの記録・公開を行う。



森 雅貴 特定非営利活動法人イシュープラスデザイン ディレクター

1995年滋賀県生まれ。サセックス大学(英国)国際開発学部卒業。学生時代は、アフリカでのスモールビジネスや欧州でのオープンイノベーションのフィールドワーク調査・質的調査研究に従事をする。シンクタンク系NPOを経て2021年より現職。脱炭素まちづくりプロジェクトの立ち上げから参画し、現在ではプロジェクトリーダーを務める。



東アジアのゼロエミッション実現を目的とした、台湾のICT・日本のエンタメを活用した 市民教育・コミュニティ構築手法の共創(2021年度)

気候変動の進展により、風水害の増加、熱波による死亡、食糧危機、新たな感染症の出現。ゆっくりと確実に人類に危機が迫りつつある。世界の温室効果ガス排出量のうち、東アジアで33.4%を占めており、アジアの共通課題の解決が地球課題の解決である。この問題に対して、各国政府は取り組みを始めているが、排出規制などのトップダウン型の取り組みだけでは不十分であり、大幅削減のためには市民のライフスタイル変革が求められる。本企画では、普通に暮らしている一般市民が気候変動を自分ごと化しライフスタイル変革を促すために、若い世代を中心に消費や生活を変える強いパワーを持つ、ゲームやアニメーションなどのエンタメ(日本に強みのある)、そしてICT(台湾に強みのある)の2つの手法に着目し、研究者、事業者、大学教員、デザイナーたちが、楽しく面白く気候変動に立ち向かうための教育手法・支え合うコミュニティ構築手法の共創に取り組んだ。

プロジェクトの実施にあたっては、市民参加型でまちづくりに先進的である台湾の実践者や研究者とのインタビューやディスカッション、また事例収集を行いながら、専門知識がない市民でも、気候変動や脱炭素について学ぶことができるプログラム作りを、日本が持つエンターテインメントの力を活用しながら行った。

デモプログラム完成後、気候変動や脱炭素の取り組みに興味関心のある方々と日本全国各地で実証実験を行い、プログラムのブラッシュアップを継続して実施している。

プロジェクトの詳細はこちらから：<https://issueplusdesign.jp/climatechange/college/>

フル(約90分)



YouTube



ダイジェスト(約15分)

ヨーロッパでの教育を背景を持つお二人が、デザインをキーワードに、アジア発のボトムアップによる社会変容について意見を交わしました。人を巻き込むためのコミュニケーションの難しさ、社会を動かす大きな目標を掲げながらも、楽しみながら地に足のついた取り組みを積み重ねることの重要性などに話が及びました。

行動変容を促すデザインとは？

森 元々スペインでいわゆる欧米の都市計画、研究をされているなかで、なぜアジアに興味を持ったのでしょうか？

今、デザインというもののスコープが変わってきていると感じています。

神尾 環境分野で言えば、今まで見ていた資源循環から、行動変容にアプローチするとなると、これまでのデザインのプラクティスの中でやってきたことが通用しなくなってきている。そして改めて日本の工芸などを見直してみると、実は最先端なのかもと、今まで気づき始めたくらいのフェーズです。

森 例えば、日本の工芸やものづくりの文脈が、実はサーキュラーエコノミーのようなところに大きく貢献しうる価値があるかもしれないということですか。

神尾 そうですね。オーガニック食品を海外から運んできて消費することの環境負荷を考えた時に、これまでの環境工学が捉える循環経済では、土着的にあった生活様式とか生活の技術のようなものが意外と軽視されてきているんじゃないかと思います。気候変動への取り組みなども、もう1回そこも含めて考えてみませんかという、まだぼんやりしたアイデアですね。

僕らの共通ワードとして、デザインがあると思います。多分僕らが捉えているデザインは、いわゆる広義のデザインと言われることで、グラフィックとかプロダクトだけではなく、人の行動変容だったり、共感を呼ぶことも射程に入ってくると思います。

環境の問題は、我慢するとか、分別を非常に細かくがんばるとか、できればやりたくないことが、メインだったのではないのでしょうか。でも、やっぱり人間って大変と感じる行動を持続するのは難しいと思うので、その中でワクワクしたり、楽しみながら取り組める仕組みを作るのが、デザイナーの役割かなと思っています。

エンターテインメントを通じて社会課題にアプローチする

森 今回カードゲームを開発したのは、まずゲームを楽しむ視点で、自分がプレイヤーとしてどう行動すればいいか考えられるからです。現実とは離れた役割と世界観が与えられるので、ある意味考えやすくなると思います。例えば、ゲームの中で行政の役割をやってみると、お金はあっても、誰にどういったサポートをしていいかわからないということが起こったりします。

ゲームの最初は、目の前にあるものだけを見て行動しがちですが、それだと自分の目標も達成できないし地域の目標も達成できないので、だんだんいろんな人と交流をしていくことになります。そうすると、あなたはこれをやった方がいい、一緒にこれができる、という交流が生まれて、ゲームの前後でコミュニティの雰囲気が全く変わるんです。それを体感できるかどうかがすごく大事だと思っています。

言語依存度を下げて通じるものは、別に国や地域、言語に関係なく理解ができるので、基本的にはイラストだけ見れば分かるようにして、なるべく専門用語を使わないことも意識しています。





神尾 涼太

神尾 日本のサブカルチャー的なものには、実はデザイン要素があると僕は思っています。ヨーロッパでは、割と大義名分みたいなものが始めにある印象です。それを共通の社会課題として意識しているのは素晴らしいことだと思うんですけど、人を動かすためには、大義名分をかざすだけでは通用しない部分も、僕はヨーロッパで見てきたところもあるので、その中でゲーム感覚とかエンタメ感覚は実はすごく重要だと思います。一方でアジアには、非常に先進的な活動の事例はたくさんあるけれど、それが言語化されてないことが多いと思ったんです。自分たちがこれまでそう意識していなかったものが、実は本質的にデザインや環境問題に携わる活動だと、再解釈するか再編集することが大事ですし、それをどうやって伝えていくのかという情報はまだ拡散しているのではないのでしょうか。今ある既存のものをきちんと分かりやすく解釈したり、もう1回編集したりする作業は、森さんとか僕ら世代のデザイナーと言われる人たちの今後の役割かなというのは、漠然としていますけど、このプロジェクトを通じて感じています。

アジア発のデザインで人の行動を変え、社会を変える

森 今回のプロジェクトで、なるべくシンプルに伝えることや、理解した人に、次は広げる役割を担ってもらうことが重要だと気づきました。「次世代に残す」は、今回のキーワードだと思っています。機会があればこれをアジアに展開したいですし、僕としてはさらに欧米に持っていきたいですね。

実は日本発で、社会課題などの問題解決をするための手法やプログラムが欧米に広がったことはないんじゃないかと思うので、ゲームフィクションを使ったプログラムは、まだまだ広げていける可能性があるんじゃないか、やってみたいなと思っています。

神尾 アジアには、まだ比較的、必要不可欠な製造や供給機能があると思うので、それはアドバンテージだと思っています。ヨーロッパは、今は製造拠点もほとんどないと思うので、新しいデザインはこちらから考えるべきなのではないかという仮説もちょっとあります。

森 僕も、海外でいわゆる先進的と呼ばれる地域や取り組みを見聞きして、やはり何かを形にするためには、拠点を持って、腰を据えて作ることがすごく大切だと思っています。今回の機会がなければ、日本国内での展開に集中していたかもしれませんが、広げていくとはそもそもどうということなんだろうかと考えたときに、もうちょっと大きく、この課題をアジアから解決をするためには何が必要なかという視点に至りました。

神尾 とにかく事例を積み上げていくことが大事だと思っています。都市デザインとして、いきなり大きなスケールで入るとやっぱり難しくなってしまって、関わるステークホルダーの数も急に増えてきます。でも例えば、地区のゴミの出し方とかゴミ捨て場のコンテナのデザインくらいだったら、がんばれば1年でも形にできないこともないと思うんです。そういう小さい切り口をたくさん作って、着実に1個ずつ積み上げていくことがやっぱり大事だと思います。ただビジョンを発信するだけではなく、それを小さい実体に落とし込んでいくことを意識して続けていきたいですね。

森 自分だけでできることは限られているので、人に渡せるようにして一緒にやっていくことが大事だと思っています。つまり国際開発の逆のアプローチで、上から落としていくのではなく、ボトムアップでメインストリームを作っていく。そこに希望を感じていますし、このプログラムでチャレンジしたいと思っていることでもあります。

課題が大きい分、できることは色々あると思いますし、理想ばかり追いかけていても仕方ないなと思うので、自分にできるやり方で、でも勝ち筋があるところを頑張っていきたいですね。



森 雅貴

〇〇 登壇者 & プロジェクト紹介 〇〇

佐々木 淳 医療法人社団悠翔会 理事長

筑波大学医学専門学群卒業後、社会福祉法人三井記念病院に内科研修医として入職。2006年に在宅療養支援診療所MRCビルクリニックを開設、2008年医療法人社団悠翔会に法人化し理事長に就任。現在、首都圏と沖縄圏にて18カ所の在宅医療専門クリニックを運営。2021年8月より東京都の委託により、東京23区内の新型コロナ感染者への広域支援を担当。2018年Ageing Asia Innovation Forum / Global Ageing Influencer選出。アジア太平洋高齢者ケアイノベーションアワード"Best Improvement in Health Outcome"部門グランプリ、フォーブス・ウェルネスアワード公共性部門グランプリ、船井財団・グレートカンパニーアワード大賞、日本経営財団賞(顕彰)等、国内外より受賞多数。著書に「在宅医療カレッジ・地域共生社会を支える多職種の学び21講」(医学書院、2018)、「在宅医療のエキスパートが教える年をとったら食べなさい」(飛鳥新社、2021)他がある。内閣府・規制改革推進会議専門委員(医療・介護・感染症対応)、厚生労働省・薬局薬剤師の業務及び薬局の機能に関するワーキンググループ構成員も務める。

認知症に注目して「地域共生社会」を再定義する(2018年度)

世界的な高齢化の進行に伴い、認知症とともに生きる人々が急激に増加している。それは認知症という病気の増加というよりは、認知症になるまで長生きできる人が増えていると考えたほうがよいかもしれない。加齢に伴い認知症の有症率は上昇していく。日本では85～94歳の2人に1人は認知症、95歳以上になると80%以上が認知症となる。しかも残る20%の人も軽度認知障害(MCI)であるとされている。認知症は、長寿社会を生きる私たちにとっては、人生の一部であると言ってもよいかもしれない。その原因疾患の予防と治療に対する取り組みはもちろん重要であるが、生理的な老化現象としての認知症は予防・治療することは難しい。また、そもそも認知症とは病名ではない。不可逆な知的機能の低下に伴い、日常生活に支障をきたすようになった「状態」である。逆に、加齢に伴って認知機能が低下しても、日常生活に困っていなければ、認知症ではないと言ってもいいのかもしれない。認知症になっても、人生を諦めることなく、最後までよく生きられる、そんな社会やコミュニティづくりを急がねばならない。

このプロジェクトでは、認知症の人を単なる「ケアが必要な存在」・「支えられる存在」ではなく、一人の住民として地域に居場所と役割を持ち続けられる、そんなコミュニティづくりの事例を、日本から164事例、台湾から22事例、収集した。事例の選択にあたっては、提供者側が考える「よいケア」ではなく、認知症当事者が「よりよく生きている」と思える事業であることを前提とした。また、地域共生社会を具現化できていることに留まらず、誰もが模倣しうる汎用化につながるヒントが含まれていることを重視し、日本・台湾両国の研究員により厳選した。情報の収集にあたっては、事業運営のコンセプトに加え、実際の事業運営上の課題や工夫(資金確保、人材確保と育成・地域住民とのよりよい関係性の維持、行政との調整など)を中心に取材・整理し、これから同様の事業に取り組みたいと考える個人・法人・自治体にとっての起業・事業運営ガイダンスとなるような情報発信を目指した。



森 博威 順天堂大学医学部総合診療科学講座 准教授、マヒドン大学熱帯医学部 客員教授

2002年鹿児島大学医学部を卒業、沖縄県立中部病院で内科研修終了後、各地で地域医療に携わる。専門領域は総合内科、地域医療、熱帯医学。2010年にタイ王国マヒドン大学熱帯医学ディプロマ、2014年博士課程を卒業し、現在は客員教授として研究、教育に関わっている。タイで熱帯医学研修やITを使用した医学教育プロジェクトを開催、展開している。国内外の地域医療を繋ぐ活動として特定非営利活動法人グローバルメディカルサポート、とちノキネットワークを主催している。



日本・タイの長所を学び合い、多職種共同でコミュニティヘルスの改善を目指す教育モデルの構築（2021年度、助成中）

日本とタイが共に抱える少子高齢化に伴う問題は、新型コロナウイルスへの対応を含め、喫緊の課題である。本プロジェクトは、双両国共通のコミュニティヘルス（地域医療保健）の社会課題5項目をピックアップし、日本とタイがそれぞれもつ長所を学び合い、多職種による協働ガバナンスの手法を用いてそれら課題の解決を目的とする。両国の地域の現状の解析、問題点の抽出を踏まえて、日タイの医療教育機関、地域医療の視察、研修を行い、両国関係者の議論のもと、多職種で構成するプロジェクトチームを立ち上げ、解決の探索を通して新しい教育モデルを構築する。これにより、地域のニーズを反映した地域包括ケアシステムの構築、ソーシャルキャピタルの強化、地域全体を診る総合医の育成、生活習慣病予防や感染症対策について、人々が協働で改善できる力を身につけていく土台を提供する。

フル(約90分)



YouTube



ダイジェスト(約15分)

最後までその人らしく幸福に生きるとはどういうことなのか、またそれを実現する社会のあり方について、医師や医療の役割を改めて問い、考える対談となりました。お二人の経験を踏まえて広く海外に目を向けて交流することの意義についても語っていただきました。

コミュニティのつながりと介護される人の幸福度

森

コミュニティのつながりと関連するのが、支えられる人たちの幸福度だと思いますが、これはなかなか定量化が難しいと僕は思っています。例えば国際的に示されている幸福度は、いろいろな指標が入っていて必ずしも客観的でない印象があります。

佐々木

何を幸福に感じるかはすごく個性が高いと思います。そこに対処するには、フレキシビリティが重要で、制度ではなく、やはりつながりの中で、その人の価値観とか人生観、優先順位、判断基準をなんとなく理解している人が近くにいることで、安心感を得られる。仮にその人が自分の意志を口から上手に発することができなくなったとしても、誰かがその人の思いに沿った状況判断ができるようなつながりが近くにあることは、幸せに生きるためにすごく重要な一つの前提条件なのではないでしょうか。

世界幸福度報告だと、日本は、社会とのつながりの指標がガクッと低いんです。孤立している人を調査すると日本は、圧倒的に世界1位で、1週間に1回以上誰かと話をしないで暮らしている人が14%という状況だそうです。世帯構成では、独居の高齢者が16%ぐらい、その次に独居の働く世代の人たちが15%ぐらいで独居だけでいたい3割、その次に多いのが老々世帯です。老々世帯になると、地域からも孤立して、夫婦間もほとんど会話がないというようなことが結構ありますね。実は日本においては、つながりが足りないこととそれによって選択肢が狭められることが幸せを感じられない要因のひとつになっているんじゃないかなと思います。

森

僕の場合、タイの地域医療の現場では、大家族だったり、家族がいなくても近くの人が病院に連れて行ってくれたり、ご飯を持ってきてくれたりして、地域のつながりの中で健康が保たれている状況を色濃く感じる事ができるのが、一つの学びだと思っています。日本も昔は、そうだったと思いますが、今、特に都市部では、それが断たれてきている。コミュニティのつながりを作る都市型のモデルというのは難しいところがあると思いますが、解決する糸口としてはどういう取り組みが今後なされるべきでしょうか？

佐々木

私はずっと首都圏で在宅ケアをやってきて、コミュニティを「作る」って無理だと思うんですよね。作るものではなく、自然とできるものだと思うので、そのドライブが都心にあるかという、かなり限定的だし希薄かなと思います。

でも台湾の台北やシンガポールだと大都市でもコミュニティがある。例えば集合住宅の1階の部分にご飯を食べる場所や困りごとを相談したりする場所がそれとなく置かれていて、住民たちにとっては「なんとなく、この時間に行くとなりの人がいる」といったつながりがあります。義務やルールがあるわけではなく、やることなくとも日がな一日安くいられる場所があったり、関わりたくなければ家にいてもいいという緩やかなつながりがすごく心地良い感じがありますね。

「居」食住は、キーワードになるかなと思います。「い」は「衣」というより居場所の「居」ですね。日本もいくつかの事例を見ましたが、やはりみんな一人で家にいるよりは誰かといたいという気持ちがどこかにある。でも新しいところに行くのはちょっと心配だから、かつて学校だったところにまた集まるというケースもあります。馴染みのある場所はキーワードになるのかもしれない。

僕らがアジアの国々に行くと、日本は高齢化先進国だから事例を教えると言われますが、逆に向こうでいろいろ見学すると、一周回って今この人たちがやっていることの方が最先端と感ずることがあります。介護保険とかいろいろな制度を作りながら、先を走っているつもりが、コミュニティに関しては実は周回遅れなんじゃないかという気分させられることは、アジアに行くときよくありますね。



佐々木 淳

社会課題の解決に求められる医療者の役割

森

社会的課題を解決するにあたって、医療職、特に医師を育成する際に、今後どういことを進めていったらいいか、お考えはありますか？

佐々木

僕は常々、日本の医者は仕事を半分しかしていないと思っています。日本の医師法の第1条には「医者は国民の健康を守れ」と書いてあるのに、我々は国民が病気になるのをじっと待って、病気になった人に病名をつけて治療することしかやっていない。交通事故とか感染症なら、健康な人が事故にあって命を救う、健康な人が感染症になってそこから命を救うということで、国民の健康を守っていると思います。ただ、今は疾病構造が変化して、高血圧、糖尿病、認知症など、生活習慣の変化に伴って体にいるような異常が出てきている。これらはある一定の閾値を超えると病名がつくのですが、本当はここを超えないようにすべきじゃないか、できるだけ病気にならずにより良い人生をより長く過ごせる支援をすべきじゃないか。今の保険診療の枠の中ではこれが多分できないと思うんです。「病気を見ずに病人を見る」という言葉もありますが、病人を見ているだけでも不十分で、その人が誰とどんな地域で暮らしているのかという生活環境も含めて見て、包括的に関わっていくのが、本来私たちがやるべきプライマリヘルスケアではないでしょうか。

日本とアジアの学びあい

森

日本では、教育の現場で医療と保健が切り離されている側面があると思います。例えば、タイの地域医療の現場で両方を見る経験は、日本の医療教育を受ける人にも学ぶところがあるのではないのでしょうか。社会と関わりながらロールモデルを作っていかれていると思いますが、経験の中で病気やその診断以外に、大切な点は何か、そういったことを勉強する枠組みとかプログラムを考えていく必要があると思いました。

海外とつながっていることは、我々にも相手にも大切なことだと思います。困った時に、日本として、もしくは私自身はどういうアイデアがあるのか、逆にこちらが行き詰まっているときに何かアイデアはないか、すぐ答えは出なくても一緒に悩んだり話し合ったりする中で、互いのつながりで人を紹介することも起こる。いろいろなつながりがあることは、国内にも国外にも非常に重要な側面があると思います。



森 博威

佐々木

我々自身、現在課題が解決できていないことに対して謙虚さを持って、お互いに学び合うという対等の目線で見ると、初めて相手の取り組みの価値をキャッチできるのではないのでしょうか。高齢化や認知症の増加は、一国にとどまる問題ではなく、地球全体が直面をする課題の一つです。様々な人がそれぞれの立場や環境で試行錯誤をして、成功体験、失敗体験を共有することで、よりよい未来がより短い距離で実現するのではないかと私は思っています。

医療・介護の領域はすごくドメスティックなもので、外に行く必然性を感じない方も多いのですが、井の中の蛙のまま、井戸の中をいかに綺麗にするかがんばっているうちに、井戸の温度がだんだん上がって手遅れになるという未来を迎える前に、目線を広げてお互いに交流すると、その中で生まれてくる価値が絶対にある。内に籠もらずに外に出て、外を見ることはすごく大事だと思います。



トヨタ財団について

トヨタ財団は、トヨタ自動車によって1974年に設立された助成財団です。世界的な視野に立ち、長期的かつ幅広く社会活動に寄与するため、生活・自然環境、社会福祉、教育文化などの領域にわたって時代のニーズに対応した課題をとりあげ、その研究ならびに事業に対して助成を行っています。国際助成プログラムに加え、研究助成プログラム、国内助成プログラムの3プログラムを助成事業の主たる柱とし、時代の要請に応じた特定課題への助成を行っています。

トヨタ財団国際助成プログラムについて

トヨタ財団国際助成プログラムでは、2013年から「アジアの共通課題」をテーマに掲げています。当初、高齢化、人の移動、そして再生可能エネルギーという3分野に対する研究と活動への助成を行うなかで、地域コミュニティにおける諸課題を理解するためには文化的な側面の理解も不可欠であるという認識を得ました。また、国境やセクターを超えた相互交流と学びあいというアプローチは、さまざまな「アジアの共通課題」に対する取り組みに対して有用であろうという考えのもと、段階的にプログラムの見直しを行っています。

その結果、現在の国際助成プログラムは、東・東南・南アジアの複数国かつマルチセクターからなるチームが、相互の直接交流を通じてアジア共通の社会課題に取り組み、その成果を社会に発信することを支援しています。領域を超えて、プロジェクトのスキームを重視し、相互交流と学びあいを通して、プロジェクトメンバーや対象となった地域にポジティブな変化を生み出すことを目的とするプログラムとなっています。

そのため、2020年に始まるCOVID-19の感染拡大は、進行中の助成プロジェクトは元より、国際助成プログラムの趣旨にも大きな影響を与えることとなりました。

現在、そして将来の世界の課題は要素が複雑に絡み合っており、解決へ向けたヒントを見つけ出すには、オンライン・オフラインを問わず、さまざまな主体による持続的な協働・共創が必要です。今後も本助成プログラムが、互いの隣国である東アジアや東南アジア、南アジアのリーダーたちを有機的に結びつけ、所期の目的が達成されることを願っています。

発行



公益財団法人トヨタ財団

〒163-0437 東京都新宿区西新宿二丁目1番1号

新宿三井ビル37階 私書箱236号

公益財団法人トヨタ財団 国際助成プログラム

<https://www.toyotafound.or.jp>

発行年月:2023年3月

デザイン: 粉山真之 (snug.)

International Grant Program Project Reports

Let's Talk about Empathy

Conversations Between the Grantees

Report

March 2023



THE TOYOTA FOUNDATION

○○ Introduction ○○

Under the theme of “Cultivating Empathy Through Learning from Our Neighbors: Practitioners’ Exchange on Common Issues in Asia,” the international grant program has been based on the method of direct mutual visits between practitioners as the foundation of the program. However, as the coronavirus pandemic from the beginning of 2020 has reduced the number of opportunities to meet others face-to-face and much communication is now done online. There is a need to reconsider the significance of mutual exchange, which is the foundation of the program, as well as the empathy expected from it.

Against this backdrop, under the theme of "Let’s Talk about Empathy - Conversations Between the Grantees," series of dialogues featured discussions on how to understand empathy through projects and how to use it to solve social issues, etc. as well as reports on the outline of grant projects in the categories of Education, the Power of Design, and Health and Care. The sessions can be viewed on YouTube.

This report provides an overview of the projects undertaken by the speakers and a summary of the discussion points.

<https://www.youtube.com/c/TheToyotaFoundation>



○○ Contents ○○

[Japanese Edition] 02-17

Introduction 20

Program 21

Session 1: Education

Speakers & Project Introduction 22

Highlights from the Dialogue 24

Session 2: The Power of Design

Speakers & Project Introduction 26

Highlights from the Dialogue 28

Session 3: Health and Care

Speakers & Project Introduction 30

Highlights from the Dialogue 32

About the Toyota Foundation 34

Session 1

Education

Speakers

Kanako Kusanagi

Assistant Professor, The Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research (CASEER),
Graduate School of Education, University of Tokyo

Sayaka Hashimoto

Visitor & Sales Team Officer, SALASUSU

Session 2

The Power of Design

Speakers

Ryota Kamio

Senior Director, Re:public Inc.

Masataka Mori

Director, issue+design

Session 3

Health and Care

Speakers

Jun Sasaki

CEO, Yushoukai Medical Corporation

Hirotake Mori


Associate Professor, Department of General Medicine, Juntendo University Faculty of Medicine;
Visiting Professor, Faculty of Tropical Medicine, Mahidol University

Speakers & Project Introduction


Kanako Kusanagi

Assistant Professor,
The Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research (CASEER),
Graduate School of Education, University of Tokyo

Her research interest is in supporting the professional learning of teachers to ensure the well-being of both teachers and students. After working as an educational consultant in Indonesia, she has been interested in facilitating teachers' local initiatives for professional learning and building a learning community. She supports schools in implementing Japanese education models such as "lesson study" and "tokkatsu"(holistic education) based on their local educational needs and interests. She also leads an international program that aims to nurture empathic, responsible, and engaged global citizens through exchanges of educational practices and multi-cultural dialogues among students, teachers, and communities in Indonesia, Malaysia, and Japan.



Toward Building Multicultural and Resilient Societies- Nurturing Empathic, Responsible and Engaged Global Citizens in Indonesia, Malaysia, and Japan in the Post-COVID-19 Pandemic (FY2020)

The COVID-19 pandemic has disrupted the way we live, learn, work, and communicate. The social crisis highlighted the problems of social exclusion and discrimination around the world. Building an inclusive, multicultural, and resilient society where every member feels respected and valued is a common challenge among Indonesia, Malaysia, and Japan. There is a gap between what the current education provides and what our children need in building such societies. In the reopening of schools after the pandemic, a new approach for learning is required to prepare its citizens to deal with new challenges in our societies.

This Global Empathic Multicultural (the GEM Project) was carried out to fill such a gap through its implementation of the program under the theme of learning together based on empathy for two years (2020-2022). Throughout the project period, schools experienced many restrictions on their educational activities due to the COVID-19 pandemic. This project aims to nurture empathic, responsible, and engaged "global citizens" by providing children with opportunities for dialogue and collaboration. Through a participatory approach, we recruit parents and community members to join a dialogue and collaboration with children to solve local issues. Also, we provide an international exchange place to share such experiences, where we learn and collaborate with people of different backgrounds and values. The theme of international exchange were social and emotional learning, online education, and the collaboration between parents/community and schools. The GEM project's ultimate goal was to support children and teachers in this challenging time through the following five activities: 1. Online workshops (Japan, Malaysia, and Indonesia), 2. Face-to-face workshops (Indonesia and Malaysia), 3. Global Citizenship Education Activity Study Group (Tokkatsu Lesson Study), 4. Face-to-face teacher international exchange, 5. Online International exchange for children.

The project built a support community for teachers and children and initiated bottom-up educational reform. Whereas the conventional teacher training focuses on acquiring new teaching methods and improving students' academic achievement, the GEM project created a safe learning space and encouraged teachers' creative educational practice to support students in coping with challenges in the pandemic.



Sayaka Hashimoto Visitor & Sales Team Officer, SALASUSU

Hashimoto became a public elementary school teacher in Tokyo after graduating university. She moved to Siem Reap, Cambodia in 2016 and has worked in an organization which supports village schools and manages hand-craft factories. She has also been in charge of product sales. She joined SALASUSU in 2017. Having the motto that "being one of those who support the growth of young people by realizing each of their values through the learnings with SALASUSU together", she has been developing and delivering fieldwork programs and online studying programs targeting students of Japanese high schools and universities. She is also engaged in intern trainings, and projects with teachers.



Educational leader development program between Japan and Cambodia by designing soft skills training through tackling global social issues (FY2020)

To accelerate the soft skills education of young people in uncertain times, it is important to exude deep and strong leadership based on the original experiences of individual teachers. Therefore, in this project, educators from Japan and Cambodia, two countries in different phases of development, traveled to each other's countries to engage in dialogue with others, shake their sense of self-worth, promote deep self-awareness, so as to grow as a true leader in accelerating soft skills education through addressing social issues.

Eleven Japanese high school teachers and 10 Cambodian educators (primary school teachers, English teachers, vocational school staff and NGO staff) have been involved. This project is coordinated by NPO SALASUSU for educators in Japan and Cambodia to connect with each other and use each other as a mirror, taking time to reflect on their own roots as educators. They have also been challenged to give concrete form to the lessons, training, events and teaching materials they want to share with their own students, getting clues from their own views and intentions on education, the values they hold most important, and the differences between the two countries, such as culture, language, values as their inspiration. The two years were divided into three phases: 1) encounter with other participants and self-reflection, 2) planning and development of small group activities (lessons, workshops, teaching materials), and 3) practice and reflection of the activities.

The first outcome is the growth of participants as educational leaders. Secondly, the participants themselves experienced the 'reality' through the online community and field visits and reflected this in their group works, which led to increase the awareness of the students of the social issues in front of them and gave them the opportunity to broaden their career choices. Lastly, the exposure of each other's educational issues and their own struggles as educators, transcending schools, regions and countries, as fellow educators, has resulted in an irreplaceable connection with people who can ask each other important questions and think and explore together in their future educational activities.

It is hoped that the spread of connections with a common understanding of issues and common struggles will continue to be a driving force against a rigid education system and lead to changes in education in their respective countries.



This dialogue between the two projects shared the vision of learning together with teachers and children. In the field of education, where correct answers are often demanded, the two speakers spoke about their efforts to create a place of empathy that transcends nationality and position, by learning with teachers.

Encouraging teachers as people

Kusanagi When I talked to Indonesian students, they shared their struggle of coming from poor communities. Their families pushed them to be teachers for economic security; however, they told me, “I don’t know if I really want to be a teacher.” They expressed the struggle between pursuing their own life interest and having to live up to expectations of their families. In Indonesia, it is difficult to pursue the passion for education because teachers feel prioritizing the interest of the government rather than the children is important in their teaching careers. But of course, there are also teachers who put children first, and I wanted to support them. This situation is similar in Japan, too. Hardworking teachers may not always be rewarded and some leave teaching due to overwork.

Hashimoto I was an elementary school teacher in my past job, but up until that point in my life, I had been able to get to college and then become a teacher without having to think too hard. So my first experience of being frustrated was my first year as a teacher. I suddenly found 38 children in front of me, and I was left to manage their daily school life as their homeroom teacher. In the midst of all this, many unexpected things happened, and I was at a loss as to what to do back then. I gradually started wondering if I was really doing right or not. I was trapped between such thoughts. I was caught in the gap between myself as a teacher and my own self, and I was unsure of what and how to teach the students in front of me.

I was involved in activities in Cambodia in my current position. The experience reminded once again how I knew nothing and could not do much. I was horrified to think that I who knew so little was teaching as a teacher. What a small world I was living in. This experience became my turning point. I thought of the wide gap in Japan where people graduate university and from day one entering society as a teacher you are required to think your own, demonstrate more unique perception and thought, and nurture more diverse thinking without any experiences in real society. So in this project, I wanted soften this gap with teachers in the front line and research how teachers can bring a more positive impact on children if they can do what they themselves wanted to do.

Significance of learning from stumbles and applying them to activities

Hashimoto A teacher in Cambodia shared his school day memory of his teacher beating him with a bamboo stick or something when he forgot to do his homework. This caused him to really disliked studying. However, he told me he happened to meet with NGOs in his teens, who opened his eyes to the importance of education. He discovered what hope education could bring and how important it was for his country. When this topic was brought up, a Japanese teacher also shared his memory. Because acting as a group is absolutely required in Japan, he was left out of the loop when he took slightly different action from the others and that was painful. He went on to say that the pain he experienced at that time was the starting point for his involvement in education. This spurred a discussion that teachers should lead children’s experiences in education to more positive directions, and I very much resonated with his conversation. I heard many teachers in Indonesia and Malaysia say that COVID triggered them to look back on their lives, their own values, and why they became educators.



Sayaka Hashimoto



Kusanagi In the dialogue between Indonesian principals and a Japanese kindergarten principal, there was a moment for the Indonesian principals to recall what is the most important as educators. Online education triggered by the pandemic had brought many challenges that the Indonesian principals did not know how to respond to parents complained that their children were not receiving adequate education. The Japanese principal said “Parents and teachers share a common goal: providing a happy and good learning environment for the children. If you could explain that clearly, parents will definitely support you. To gain such support you must first share your thoughts behind education and your hope for your children. Parents will be happy to support you.” When the Indonesian principals heard these words, they remembered what is most important is supporting children.

As long as teachers and parents share the same goal and make opportunities for dialogue, they can learn from each other. Then teachers can get a sense of fulfillment and joy as educators.

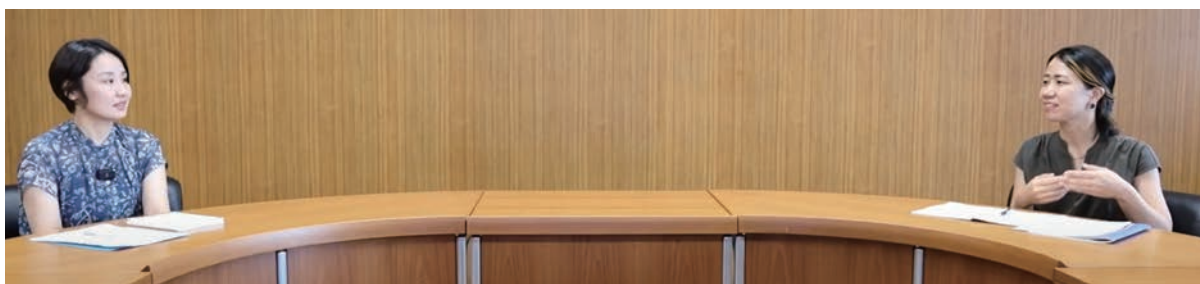
Communication that transcends the position of “teacher” or “expert”

Kusanagi Collaborative and active learning is not as easy as it might seem, especially in emerging countries where academic achievement is most prioritized in schools. There is a norm that teachers must be always right and teach correct knowledge. In the program, teachers often asked “What is the right way to implement global citizenship education?” It was difficult in the beginning to convey that there is no right answer. Some have come to understand that different schools have different practices and that they created them through trial and error. But to be honest, I think there are still many others who did not understand of what I was talking about.

Hashimoto People will not realize what they want to do or what skills they lack until they actually try out. So it was very difficult to bring the teachers into that kind of situation naturally. In hindsight, I really struggled with the question of how to create a place where teachers could do what they really wanted to do as their true selves to people around them, and how to draw out such feelings from the teachers on the online platform.

Kusanagi The pandemic has made it almost impossible to do things the “conventional way,” and in a sense, teachers could no longer be perfect teachers. At such time, it was interesting teachers were asked what kind of persons they are as individuals and what they want to do in their lives. In this sense, the project was interesting and dynamic. Until now, teachers felt constrained by their roles. However, in the future, we do not need to be constrained by our roles but transform the rules and framework of society in order for everyone to be happy.

Hashimoto Through the project I put focus on how to break the shell of the teachers. But at the same time, I often realize that I myself was looking at the person in front of me as a “teacher.” I was conflicted about whether I was seeing the person in front of me as an individual person or not. Going forward, it will be very important for me to have dialogue and secure time for talks. I think I learned some important lessons for my life from this project.



Speakers & Project Introduction



Ryota Kamio Senior Director, Re:public, Inc.

Ryota is a Yokohama native, an urbanist, and a designer. He earned a master's degree in Design for Emergent Futures from the Institute for Advanced Architecture of Catalonia (IAAC) / ELISAVA School of Design and Engineering. He also holds a master's degree from the University of Barcelona in Spatial Planning & Environmental Management. Since 2016, Ryota has been a freelance researcher working around urban issues that deal with housing, gentrification, and public spaces. He also designs lifestyles and living environments that complement emerging technologies.



Design for People-Centered Circular Systems: Examining food packaging, services and hygiene concerns from post COVID-19 lifestyle changes (FY2021, Ongoing)

Globally, there is a paradigm shift towards a more circular economy that steers away from mass production, mass consumption, and mass disposal. Coupled with the abrupt lifestyle changes caused by the COVID-19 pandemic, our society's behavior and mindset towards hygiene continues to alter. In particular, this shift in mindset towards hygiene has influenced the ways in which food is packaged, which has challenged the environmental mission of waste reduction. In the past, the ban or limitation of single-use plastic for food packaging seems to have been the dominant solution to waste reduction. Instead, there is a need for novel food packaging solutions that take into account the environment along with the new perceptions and needs that surround hygiene. The purpose of this project is to design a circular system around food packaging in Taiwan and Japan, countries that have successfully implemented circular economies and are expected to develop exponentially. By having a "people-centered" approach that addresses new societal values and perceptions towards hygiene, this project aims to foster sustainable development across Asia.

The project is planned in three phases: 1) research, 2) design (prototyping), and 3) documentation. In the first year, we established a research methodology to identify consumer behavior patterns and conducted user research in both Japan and Taiwan. Future work will include prototyping a design around food based on the research results and documenting and publishing the entire process.



Masataka Mori Director, issue+design

Born in 1995 in Shiga Prefecture, Japan, Masataka Mori graduated from the Department of International Development, University of Sussex (UK). As a student, he engaged in fieldwork and qualitative research on small businesses in Africa and open innovations in Europe. After working for a nonprofit think tank, he has been in his current position since 2021. He has been involved in the Decarbonising Cities project since its inception and is now the project leader.



Co-creation of civic education and community building methods using Taiwanese ICT and Japanese entertainment for the purpose of realizing zero emissions in East Asia (FY2021)

Climate change is causing increased wind and flood damage, deaths from heat waves, food crises, and the emergence of new infectious diseases. Slowly and surely, a crisis is approaching humanity. East Asia accounts for 33.4% of the world's greenhouse gas emissions, and the solution to the common problem of Asia is the solution to the global problem. Governments have begun to take action to address this issue, but top-down measures such as emission regulations are not enough, and citizens must change their lifestyles to achieve significant reductions. In this project, in order to encourage ordinary citizens to make climate change their own issue and change their lifestyles, we focused on two methods that have a strong power to change consumption and lifestyles, especially among the younger generation: entertainment such as games and animation (a strength in Japan) and ICT (a strength in Taiwan). Researchers, businesspeople, university faculty, and designers worked together to create educational methods and supportive community building methods to confront climate change in a fun and interesting way.

In implementing this project, we conducted interviews and discussions with practitioners and researchers in Taiwan, which is a leader in citizen participation and city planning and collected case studies. The program was conducted while leveraging the power of entertainment.

After the completion of the demo program, we are continuing to brush up the program by conducting demonstration tests in various locations throughout Japan with people who are interested in climate change and decarbonisation initiatives.

For more information on the project, please visit: <https://issueplusdesign.jp/climatechange/college/>



With their shared backgrounds in European education, the two exchanged opinions on bottom-up social transformation originating in Asia, with design as the key word. The discussion covered the difficulty of communicating with people to get them engaged and the importance of having fun while building on realistic initiatives, even while setting big goals that will move society.

What kind of design encourages behavior change?

Mori Why did you become interested in Asia while you were originally researching so-called Western urban planning in Spain?

Kamio I feel that the scope of what is called design is changing now. In the environmental field, when it comes to approaching behavior change from the resource circulation we have been looking at, what we have been doing in our design practices no longer passes muster. And when I take a fresh look at Japanese crafts for example, I realize that they may actually be cutting edge, and I am at the phase of just beginning to realize this.

Mori For example, do you mean that the context of Japanese crafts and manufacturing might actually have value that could contribute significantly to areas like the circular economy?

Kamio Yes, that's right. When we consider the environmental impact of organic food transported from overseas for consumption, I think that the circular economy as understood by environmental engineering to date has unexpectedly underestimated indigenous lifestyles and lifestyle technologies. It's still a hazy idea that we should consider including that once more in our efforts to address climate change and other issues.

I think our common word is design. I think that the kind of design that we are considering is design in the broad sense of the word, which encompasses not only graphics and products, but also behavioral changes in people, and things that evoke empathy. It seems to me that the main actions for environmental issues were things that we would avoid doing if we could, such as enduring or doing our best to be very meticulous about sorting our trash. Yet, I think it is difficult for people to sustain activities that they find difficult, so I think the role of designers is to create a framework that allows people to undertake initiatives while being excited and having fun in the process.

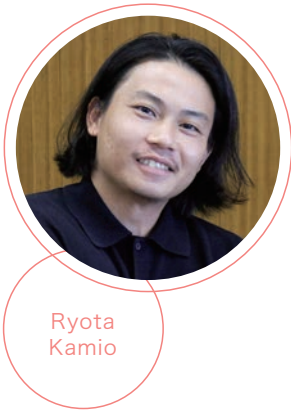
Approaching social issues through entertainment

Mori We developed the card game because people can think about how they should act as a player while enjoying the game first. I think in some ways the game format makes it easier for us to grasp the issues by providing a role and a worldview that is separate from reality. If you play the role of government, for example, you may have budget but not know who to support or what kind of support to give.

At the beginning of the game, players tend to look only at what is in front of them and act accordingly, but this does not help them achieve their own goals or those of the community, so they gradually interact with other players, who have a variety of roles. Then there is an exchange that says, you should do this, we can do this together. The atmosphere of the community changes completely before and after the game. I think it is very important for the participants to share the experience.

If something can be comprehended by reducing language dependence, it can be understood regardless of country, region, or language. Basically, we try to make our products understandable only by looking at illustrations, and we try to avoid using technical jargon.





Kamio

I believe that there are actually design elements in Japanese subcultures. In Europe, there seems something rather like a cause at the outset of the design process. It is wonderful that people are aware of the cause as a shared social issue, but to move people, it is not enough to just raise a cause, and I have witnessed the difficulties in Europe. In this light, I think the sense of games and entertainment is actually very important.

On the other hand, I thought that although there are many cases of very advanced activities in Asia, they are often not put into words. I feel it is important to reinterpret or re-edit the fact that something we have not been so aware of is actually essentially an activity that is involved in design and environmental issues. Information on how to communicate this is still spreading.

I have a vague feeling through this project, that the role of myself, Mr. Mori and other designers of our generation will be to properly interpret existing things and re-edit them in a way that is easy to understand.

Changing people's behavior and society through the power of design originating in Asia

Mori

In this project, I realized that it is important to communicate as simply as possible and to ask those who understand to take on a role to spread the message next time. I believe that "leave for the next generation" is the key phrase this time.

If I have the chance, I would like to expand this to Asia and further to Europe and the United States. In fact, I think there has never been a method or program originating in Japan that has spread to the West to solve social issues and other problems. Therefore, I think there is still potential for programs using gamification to expand, and I would like to attempt it.

Kamio

I believe that Asia still has relatively indispensable manufacturing and supply functions, and I think that's an advantage. Europe has very few manufacturing bases left now, so there is a hypothesis that new designs should be considered in the Asian region.

Mori

I too have seen and heard about so-called advanced regions and initiatives overseas. To turn ideas into reality, it is very important to have a base of operations and to build from the ground up. If not for this opportunity, I would have focused on developing the project in Japan. But when I thought about expanding the project, I came to view what is needed to solve this global issue from the Asian perspective.

Kamio

In any case, I think it is important to build up examples. As an urban design, it is difficult to suddenly enter a market on a large scale, and the number of stakeholders involved quickly increases. However, I think it is possible to produce results in one year, for example, the way garbage is disposed of in the district or the design of a container for a garbage disposal site. I think it is important to make many such small steps and steadily build them up one by one. I would like to continue to be conscious of not only communicating a vision, but also incorporating it into a small reality.

Mori


There is a limit to what I can do on my own, so it is important for me to be able to pass it on to others and work with them. Put differently, it is the opposite approach to international development. Here the mainstream is from the bottom up, rather than the top down. That is where I feel hopeful and what I want to challenge with this program.

I think there are many things that can be done because the challenges are great, and I think it is no use chasing after just ideals all the time. I would therefore like to do my best in the way I can and where I can win.



Speakers & Project Introduction

Jun Sasaki CEO, Yushoukai Medical Corporation

Dr. Sasaki is CEO at Yushoukai Medical Corp., the largest group of home care clinics in the Tokyo metropolitan area. He has won multiple awards including Global Ageing Influencer in 2018 and 4th & 5th Asia Pacific Elder-care Innovation Awards in both 2016 and 2017 as best home care provider, and Forbes Wellness Award in 2016. Before starting Yushoukai, he served as general practitioner and gastroenterologist in Mitsui Memorial Hospital after graduating from Tsukuba University. He is an expert member of Regulatory Reform Promotion Council of the Cabinet Office and Board Member of Ageing Asia Innovation Forum. 

Redefining "community symbiotic society" focusing on dementia (FY2018)

As the world population ages, the number of people living with dementia is increasing rapidly. Rather than an increase in the number of dementia cases, it might be better to think of this as an increase in the number of people who can live long enough to develop dementia. The prevalence of dementia increases with age. In Japan, one out of every two people between the ages of 85 and 94 has dementia, and more than 80% of people over the age of 95 have dementia. It is estimated that 20% of the remaining people also have mild cognitive impairment (MCI). It may be said that dementia is a part of life for those of us living in a long-lived society. While efforts to prevent and treat these diseases that cause it are of course important, dementia as a physiological aging phenomenon is difficult to prevent and treat. In addition, dementia is not the name of a disease, but a condition that causes irreversible loss of intellectual function and interferes with daily life. We need to hasten the creation of a society and community where people with dementia can live well until the end of their lives without giving up.

In this project, we collected case studies of community development in Japan and Taiwan, where people with dementia are not just "people who need care" or "people who can be supported," but people who can continue to have a place and role in the community as residents. In selecting the case studies, we assumed that the projects were not based on the provider's idea of "good care," but on the premise that the people with dementia would feel that they were living a better life. In addition, the case studies were carefully selected by researchers from both Japan and Taiwan, with an emphasis on not only embodying a social inclusion, but also containing hints that can be generalized and adopted by anyone. In collecting information, we did not only focus on the concept of the business operation, but also on the challenges and innovations in the actual business operation (securing funds, securing and training human resources, maintaining good relationships with local residents, coordinating with the mutual government, etc.). The information collected is intended to provide guidance for individuals, corporations, and local governments who wish to start and operate similar businesses.



Hirotake Mori

Associate Professor, Department of General Medicine, Juntendo University Faculty of Medicine;
Visiting Professor, Faculty of Tropical Medicine, Mahidol University

Dr. Mori is a medical doctor specializing in general medicine, community health and tropical medicine. After graduating from Kagoshima University in 2002, he started his career as a resident physician at Okinawa Chubu Hospital and has engaged in community health in various places. He undertook a Diploma in Tropical Medicine and Hygiene at Mahidol University in 2010 and completed a doctoral program in 2014. In addition to teaching at Juntendo University, he is currently serving as a visiting professor and involved in teaching and research in Mahidol University as well as organizing training programs of tropical medicines and medical education projects utilizing IT. Also, he is leading nonprofit initiatives called Glocal Medical Support and Tochinoki Network to connect community-based healthcare network internationally.



Building an educational model for improving community health through collaborative learning: The Japan–Thailand Multidisciplinary International Consortium (FY2021, Ongoing)

Problems associated with the declining birthrate and aging population, including the response towards the novel coronavirus, are urgent issues faced by both Japan and Thailand. Through a multidisciplinary collaborative governance approach, the present project aims to resolve the five essential social issues in community healthcare that are common in both Japan and Thailand. We intend to summarize the epidemiological data, analyze the current situation in communities in both countries, and identify the problems. Study tours of medical educational institutions and community healthcare facilities are conducted in both Japan and Thailand, and based on discussions among stakeholders in both countries, a multidisciplinary project team was set up to explore solutions. We intend to establish an educational system built on a foundation rooted in the following pillars: building a community-based integrated care system that reflects the needs of the community; strengthening social capital; training general practitioners who oversee the entire community; preventing lifestyle-related diseases; and providing education about infectious diseases.



This dialogue reexamined the role of doctors and care and considered what it means to live happily until the end of one's life, and how society can realize such a life. They also talked from their experiences about the significance of looking broadly overseas for exchange.

Community connectedness and the happiness of those receiving care

Mori

Related to community connectedness is the well-being of those who are receiving care, which I believe is difficult to quantify. I have the impression, for example, that the level of happiness shown internationally is not always objective, as it includes various indicators.

Sasaki

I think what makes us feel happy depends highly on the individual. To deal with this, flexibility is important, not in systems, but in connections, and having someone nearby who somehow understands one's values, outlook on life, priorities, and criteria for decision-making can provide a sense of comfort. Even if a person is no longer able to articulate his or her own intentions well, I think it is a very key prerequisite for living a happy life to have a connection nearby that enables someone else to judge the situation according to the person's thoughts and feelings.

According to the World Happiness Report, Japan's index of social connectedness is exceedingly low. Japan is by far the number one in the world when surveying people who are alone, with 14% of the population living without talking to someone at least once a week. In terms of household composition, about 16% of the elderly live alone, followed by about 15% of the working generation who live alone, with about 30% living alone, followed by elderly households. It is quite common for elderly households to be isolated from the community and for couples to have little or no conversation with each other. In fact, I think that the lack of connection and the resulting narrowing of options is one of the factors that keeps people in Japan from feeling happy.

Mori

In my case, one of the things I have learned is that in the community medical care field in Thailand, one can strongly feel the situation where health is maintained through community connections. For example, living in a large family and being taken care of, or having neighbors who take you to the hospital, deliver food, etc., even if you don't have family nearby. I believe this used to be the case in Japan as well, but now, especially in urban areas, it is fading away. I think it is difficult to create an urban model for building community connections, but what kind of efforts should be made in the future as a solution?

Sasaki

I have been engaged home care in the Tokyo Metropolitan area for a long time. and I don't think it's possible to "create" a community. It's not something you can create, but something that forms naturally, so I think that drive is very limited and rare in the central Tokyo.

Yet there are communities even in big cities in places like Taipei, Taiwan, or Singapore. On the ground floor of housing complexes, for instance, there are places to eat and discuss problems. Residents feel a sense of connection with each other, as if "somehow, when I go there at this time, that person will be there." There are no obligations or rules, but a place where you can spend the day cheaply even if you have nothing to do. And there is a loose connection that allows you to stay at home if you don't want to feel like engaging that day, which I find very comfortable.

I think "place", food, and shelter would be key words. I have seen some examples in Japan, but again, everyone has a feeling somewhere that they would rather be with someone than at home alone. People can be a bit anxious about going to a new place, so in some cases they gather again at what used to be a school. I think familiar places may be the key word.

When we go to Asian countries, we are told that Japan is an advanced aging society so please share some case studies. But when we visit such countries, we do a full circle sometimes feel that what they are doing now is more leading-edge. When I go to Asia, I often feel as if Japan is running ahead of the curve in creating various systems, such as long-term care insurance, but in fact it is behind the times when it comes to communities.



Jun Sasaki

The role of healthcare professionals in solving social issues

Mori

Do you have any thoughts on what should be promoted in the future when developing healthcare professionals, especially doctors, in solving social issues?

Sasaki

I have always thought that Japanese doctors do only half the work. Article 1 of Japan's Medical Practitioners Act states that "Medical practitioners are to contribute to the improvement and promotion of public health," yet all they do is wait for the people to get sick and then name the disease and treat those who are sick. If it is a traffic accident or an infectious disease, I think we protect the health of the people by saving the lives of healthy people. However, the disease structure has now changed, and various abnormalities have appeared in the body as a result of lifestyle changes, such as hypertension, diabetes, and dementia. These are diseases that are named after certain thresholds are exceeded, but shouldn't we really try not to exceed these thresholds, or help people live better lives longer without getting sick as much as possible? I don't think we can do this within the current framework of insurance-covered treatment. There is a saying, "Don't treat the disease, treat the sick person," but it is not enough to just look at the sick person. We must also look at the person's living environment, including who he or she is living with and in what kind of community, and be involved in a holistic manner, which I believe is the primary health care we should be providing.

Japan and Asia learning from each other

Mori

In Japan, I think there is an aspect of medical care and healthcare being separated in the field of education. For example, the experience of seeing both in the front lines of community medical care in Thailand is something that those who receive medical care education in Japan can learn from. I think you are creating role models while interacting with society, but I thought it was necessary to come up with a framework or program to study what is important in the experience, other than the disease and its diagnosis.

I think it is important for us to be connected with overseas medical and nursing care facilities. When they are faced with a problem, I may come up with some ideas from Japanese facilities or myself, and conversely, they may have some ideas when we are at a loss. Even if we don't get an answer right away, as we worry and discuss together, mutual connections will arise to introduce people to each other. I believe that having various connections is a vital aspect, both domestically and internationally.



Sasaki

I think we can only comprehend the value of the overseas medical and nursing care facilities' efforts when we look at each other as equals, humbly learning from each other for the issues that we ourselves are currently unable to solve. The aging of the population and the increase in dementia are not problems that are confined to a single country but are global issues. I believe we can reach a better future faster when various people share their success and failure stories through trial and error in their own positions and environments.

The medical care and nursing care fields are very domestic, and many people don't feel the necessity to go outside. But before it's too late, I think it is very important to look at the outside world instead of only staying inside.



○○ The Toyota Foundation ○○

The Toyota Foundation is a grant-making foundation established in 1974 by the Toyota Motor Corporation. It views events from a global perspective as it works to support activities that bring broad, long-term benefits to society. The Toyota Foundation identifies issues in a wide range of areas in line with current needs, including human and natural environments, social welfare, and education and culture, and provides grants for research and projects that address these issues.

○○ International Grant Program ○○

The grant program focuses on deepening mutual understanding and knowledge-sharing among people on the ground in East, Southeast and South Asia who are finding solutions to shared issues. Through promoting direct interaction among key players, the grant program aims to survey and analyze situations in target countries, obtain new perspectives, and expand the potential of future generations. With multinational teams comprised of participants from diverse backgrounds, projects can avoid conventional linear relationships, such as “supporter and supported” or “instructor and trainee,” and instead form cooperative and creative alliances that consider, act on, and construct solutions to shared issues. The grant program anticipates that these partnerships, which extend beyond such factors as nationality, age, and organizational affiliation, will produce significant social change through fostering a process of mutual learning. Therefore, the COVID-19 pandemic beginning in 2020 had a significant impact on the objectives of the international grant program, not to mention ongoing grant projects. Current and future global challenges are complex and intertwined, and finding clues to solutions will require sustained collaboration and co-creation by a variety of actors, both online and offline. We hope that this grant program will continue to organically bring together leaders from neighboring East, Southeast and South Asia to achieve its intended goals.



International Grant Program
The Toyota Foundation
Shinjuku Mitsui Building 37F,
2-1-1 Nishi-Shinjuku, Shinjuku-ku,
Tokyo 163-0437, Japan
<https://www.toyotafound.or.jp>

Published in March 2023
Designed by Masayuki Momiyama (snug.)

対談動画（フルバージョン、ダイジェスト版）はこちらからご視聴ください。

Access to the digest movies with English dubbed.



<https://www.youtube.com/c/TheToyotaFoundation>

トヨタ財団助成プログラム、セミナー等の最新情報は
ウェブサイトからご覧ください。

For the latest information on the Toyota Foundation,
please visit the website.

日本語



<https://www.toyotafound.or.jp/>

English



<https://www.toyotafound.or.jp/english/>